

< 2019年5月 >

古賀 順子

「文化財保存」

ノートルダム大聖堂が炎上してちょうど1ヶ月が過ぎた。残った石の構造を補強し、安全性を確認する作業が続いている。再建への寄付金は想像を超えるスピードで進み、ラ・クロワ紙(La Croix)によれば、この1ヶ月で分かっている額だけで8億8千万ユーロ(約1200億円)が集まり波紋を呼んでいる。海外や数字を明らかにしていない機関を合わせると10億ユーロは下らず、募金を中止すべきか、余る寄付金をどうするか、議論の的となっている。

フランス国内には文化財の指定や登録を受けている建造物が4万4千件を超えている。多くの文化財が資金不足で思うような修復ができない。危機に瀕している例も少なくない。ノートルダム大聖堂再建に寄せられた寄付金は、ノートルダムが文化財を超える存在であることを証明しているが、売名行為や税金対策の寄付との反発もある。各地方自治体は、資金がなく、修復したくてもできない文化財を抱えて苦勞している。ノートルダム大聖堂炎上は、凶らずも文化財保存のための資金について考えさせる結果となった。

4万4千分の1が、ル・コルビュジエが関与した平底船「ルイズ・カトリーヌ号」、フランス救世軍がホームレスを収容していた「アジュール・フロタン」(浮かぶ避難所)である。昨年2月セーヌ川増水で沈んで15ヶ月。引揚げや修理・修復の資金がなく、何もできない状態だった。その復活プロジェクトが今月からいよいよ始まる。10年以上船の救済に尽力されてきた建築家遠藤秀平氏の情熱と確固たる決意の賜物に他ならない。

沈んでしまった船体の潜水調査が行われ、修理、引揚げ、修復が始まる。その資金を調達し、さらには棧橋寄贈を始めとする現物支給が実現するのも遠藤秀平氏に賛同する日本企業、日本の建築家が増えているか

らである。自らの信念を忠実に守り、今日まで諦めることなく支援活動が続けてこられたことに心から敬意を表し、ジュルナル・デ・ザール紙(Le Journal des Arts)(2019年5月9日号)のインタビューに応えた遠藤秀平氏の言葉を紹介させていただく。

ノートルダム大聖堂炎上を機に、フランス国内の文化財支援の現状が論議されています。多くの文化財が資金不足に苦しんでいます。

日本においても同じ問題があります。経済活動と歴史を重要視することは相反することかもしれません。記憶や記録がないほうが経済活動は行いやすいのでしょうか? しかし、それではわれわれは豊かになれないことを多くの人が知っています。それを解決する方法があるとすれば、人それぞれの目の前にある具体的なことを少しずつ取り組むことだと信じています。

1) LC号のための資金集めをされた理由は何でしょうか。

1929年にル・コルビュジエがLC号を設計(リノベーション)しましたが、その担当を日本人建築家前川国男が行いました。前川国男は初めて近代建築に参加した日本人建築家です。そして現代日本の建築家の元祖になった人です。その前川国男の足跡を残すことに尽力するのは、日本人建築家として当然のことです。私の関与のきっかけは、この船の持ち主であったフランシス・ケルテキアンさんから2006年にシェルターのデザインを依頼されたことが始まりです。そのシェルターは実現しませんでした。修復には関与し続けてきました。その途上でLC号が沈んでしまいました。この状態を元に戻すことは、関与してきた私の責任でもあります。

2) コルビュジエ船を再浮上させ、その後の修理・修復のために100万ユーロの支援金を集められたと伺って

いますが、そうでしょうか。

100万ユーロを集めた訳ではありません。公益財団法人国際文化会館からの活動への助成金100万ユーロ以上を受けました。この国際文化会館の活動には様々な寄付が寄せられています。

また、私は2017年にクラウドファンディングにより日本国内で600万を集めました。その資金によりLC号を多くの人に知ってもらう活動を行いました。またその中から2万ユーロをLC号のアソシエーションに送金しています。その後LC号が沈みました。

3) 支援金をくださった方々はどのような方々ですか。公益財団法人国際文化会館は、東京において国際的な文化活動を行う組織です。この国際文化会館の建物を建築家前川國男が設計をしました。そして今も健全に使われ、関係者がこの建物のことを誇りに思っています。そこに寄付を行った方は文化が重要であることに確信を持っている人です。また、お金ではありませんが、棧橋を寄贈してくれる日本人がいます。それはアロイという名のステンレス加工の会社です。この棧橋が2017年に到着していれば船は沈まなかったでしょう。2017年のクラウドファンディングに協力してくれた人は、主に日本の建築の関係者です。

4) 支援金を出された方々にはどのような見返りがありますか。また、支援金の条件はなんだったのでしょうか。

なにも見返りはありません。あるとすればLC号が完成したのちには、ここを拠点として日本の文化を発信する責任を負うことです。その活動は私の活動母体である日本建築設計学会により行われ、資金を出した国際文化会館は関与しません。それは年間に1ヶ月ほどの期間を想定しています。2017年のクラウドファンディングに協力してくれたひとの見返りは、船の中に名前のプレートを残すことです。しかし、残念ながらまだ取り付けられていません。

5) 日本人がルイズ・カトリーヌ号に関心を持つ理由はなんでしょうか。

前川國男の話題以外には世界的な難民問題がありません。(LC号は難民救済船でした)日本においては難民に関してはまだまだ問題意識が低いと言わざるを得ません。今後日本においても大きな問題となることは間違いありません。この問題を考える上でルイズ・カ

トリーヌ号は重要なヒントになります。それは国家や政府に頼らなくてもできることはあると証明していることです。また、この船の実現には多くの女性の協力がありました。今後の社会においても女性の活躍や協力は重要です。そのことをこの船は訴えかけています。今回の補助金をうけること、またそれ以外にも古賀さんをはじめ多くの女性が私を助けてくれています。女性の協力により現在の活動があると認識しています。

6) 2009年フェスティバル・ドトヌヌ時のように、今後も建築家としてLC号に関わっていかれるでしょうか。

私は今後も関与すると思っています。すくなくとも修復が終わるまで確実に責任を果たさなければなりません。2008年12月にシャルターのデザインを発表しましたが実現できませんでした。今回の工事の途上ではシェルターを実現したいけれど資金の問題が残っています。より多くの人、パリの人、フランス人、世界の人にこの船のことを知ってもらいたい。われわれはそのために2020年にアルセナルで「アジュール・フロタン」に関する展覧会を開催する予定です。ようやく始まりを迎えました。